

あ と が き

最近の日本では、カタカナ語や略語が文章や会話に多く使われ、しばしば何のことやらわからないことがあります。しかし「メタボ」といえば、今では子どもでも知っています。「メタボ」は、特定健診・特定保健指導のキーワードの一つ「内臓脂肪症候群」の英訳「メタボリックシンドローム」をさらに略したものです。厚生労働省は、新たに導入する特定健診・特定保健指導を国民や関係者に早く理解してもらうために、日本語ではなくあえて英語で表現する方法をとりました。さらに、マスメディアもこれに呼応して毎日のようにメタボ関連情報を取り上げ、短期間で国民にこの言葉を浸透させました。厚生労働省の見事な技ありです。

さて、その特定健診・特定保健指導が、今年の4月から40歳～74歳のすべての国民を対象に実施されます。あと1ヵ月しか時間がありません。本当にうまく対応できるのでしょうか。新しく検査項目に入った腹囲の測定方法、血糖検査などの取扱い、保健指導の実施方法や人材の問題、職域・地域間の調整、電磁的方法によるデータの報告・管理などの問題に関して、毎日のように行政や医療関係者による打ち合わせ会が開かれ、真剣な会議が重ねられています。来年の「あとかぎ」では、ぜひその成果について紹介できることを期待しつつ、本会も総力を上げてその準備に取り組んでいるところです。

それにしても、略語は医学関係では特によく使われています。同じ略語でも専門領域や該当する疾患によって意味が異なり、素人には理解が難しいことがある反面、「QOL」や「EBM」のようにすっかり定着して、略語の方がそのニュアンスが伝わりやすい言葉もあります。中でも、近年よく使われている「CKD」という略語は、私どもにとってたいへん重要な言葉と思われます。

CKDとは、Chronic Kidney Diseaseの頭文字をとったもので、日本でも昔からある疾患「慢性腎臓病」のことです。CKDは末期腎不全の予備軍であり、心血管疾患の大きな危険因子でもあります。今日では治療法が進歩し、末期腎不全への進行抑制や合併症の予防が可能となってきました。このためCKDを早期に発見して適切な治療に結びつける取り組みが世界的規模で展開されています。2年ほど前から日本でもCKD対策の重要性が再認識され、国も研究班や対策協議会の立上げに力を入れ始めました。そのため、関連学会も一層元気が出て、次々と新しいアイデアや研究データが報告されてきています。

わが国の人工透析患者数は毎年1万人ずつ増加して、今や27万人に達するといわれています。その1人当たりの医療費は、年間500～600万円ほどかかるといわれ、増大する医療費の大きな原因となっています。一方、CKDと肥満や糖尿病、高血圧、喫煙などとの関係もわかってきており、具体的な対応方法が示された「CKD診療ガイド」も作成されています。まさにこのCKD対策こそ、国が考えている医療費削減とメタボ対策の両方に大きな効果をもたらすものとして期待が寄せられています。

また私どもにとってたいへん嬉しいことは、このCKD対策をテーマとする学会や検討会議で本会の年報データが活用され、私どもが何十年も地道に続けてきた学校検尿が改めて評価されていることです。長い間、一生懸命検査をしてくれた人たち、検診をご担当いただいた先生方、結果を集・統計してくれた人たち、データを分析しコメントをくださった専門医の先生方、皆さんに心よりお礼を申し上げます。

このように、本会ではこれまで年報の作成に当たり、検査データから浮かび上がってくる状況や問題点を健康管理のための施策に活かしていただくため、ご指導いただいている各分野の先生方をお願いして、学問的なデータとして評価・分析を行っていただいております。このようなコンセプトに基づき作成した年報「2008年版 通巻第37号」ができあがりましてお届けいたします。お気づきの点など、ご意見いただければありがたく存じます。

今後とも、なにとぞよろしく、ご指導、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

平成20年3月

財団法人 東京都予防医学協会
専務理事 山内 邦昭